

---

# 夜見酒旅館

鱒淵深志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜見酒旅館

### 【Nコード】

N2114T

### 【作者名】

鱒淵深志

### 【あらすじ】

「夜見酒旅館」は、西暦340年。仁徳天皇28年に皇紀1000年を記念して創業された老舗旅館だ。現存する中では世界でも最古の歴史を誇るのだが、その存在を知る人はほとんど居ない。なぜなら、この夜見酒旅館は多くの異世界に通じる「門」を管理するという役割があり、その役割の特殊性故に、多くの人に知られるわけにはいかなかったのだ。幽世から異世界まで無限の道と繋がっている門の管理者として選ばれたのが、夜見酒誠と夜見酒照美の夫婦なのである。

第一章をまとめて投稿します。評判が良ければ、第二章に続くか  
もしれません。

## 第一話 森からの客（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第一話 森からの客

おや、珍しいこともあるものです。当旅館に『森』からお客様がいらっしゃるなんて。おそらく10年ぶりくらいのことでしょう。『門』からのお客様は、それこそ年がら年中ひっきりなしですが、『森』からのお客様は本当に珍しいですね。とはいえ、大切なお客様です。従業員の皆さん、粗相の無いようにお迎えの準備をお願いしますね。

「いらつしやいませ井上一夫様、夜見酒旅館よみさかへようこそおいで下さいました。旅立ちの時までごゆっくりお過ごし下さい」  
玄関に勢揃いした約50名のスタッフが、元気よく一斉に歓迎の挨拶をする。

森からの客は、四十がらみの紳士だ。荷物は有名ブランドの中型バッグが一つだけで、かなり上質なスーツを見事に着こなしている。ただ残念なことに、森で転んでしまったのか、スラックスには泥汚れがべつとりと付き、ジャケットにはかき裂きまでこしらえている。だが、そんな程度のことと、眉をしかめる者などここには誰もいない。全員がにこやかに、マニュアル通りの完璧なお辞儀をしている。客は何が起こったのか理解もできず、目だけをきよるきよると動かしながら、見事に玄関先で固まっている。

それも当然だろう。井上は事業に失敗して会社と家族を失ったことを悲観し、死に場所を求めて薄暗い森林の中を彷徨っていた。そして慣れない森歩きに疲れ、大きな岩に腰掛けて休憩していると、  
ろで突然、

「お待たせ致しました、夜見酒旅館の仲居でございます」という言葉と共に、若い女性が突然現れたのだ。

まさかこんな森の奥深くで人に、ましてや若い女性と出会うなどとは考えもしなかった。そのため、タバコを吸う現場を見つかってしまった中学生のようにパニックに陥ってしまったのも無理からぬことだろう。仲居は言葉も出ない井上に軽く会釈をすると、横に置いてあった井上のバッグを持ち、

「こちらでございます」

と声をかけ、すたすたと森の奥に向かって歩き始めた。

バッグの中には遺書と首を括るためのロープ、そして死にきれなかった時のためにと用意しておいた包丁が入っている。バッグを返してもらおうと何かを言おうとしたが、混乱と疲れで適切な言葉も浮かばないままふらふらと、旅館の仲居と称する女性を追いかけるしかなかったのだ。すると、五分程も歩いた頃だろうか。突然森が開け、歴史を感じる見事な造りの旅館が目の前に現れた。

## 第二話 支配人登場（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第二話 支配人登場

とにかく、ひと目で歴史を感じるその様は、一瞬、これまでのことを忘れさせるほどの力を持っていた。その建物を例えるなら、「坊ちゃんの湯」で有名な道後温泉の建物を少し大きくし、さらに歴史を重ねたという感じだろうか。つまり、いかにも由緒ある旅館という佇まいなのだ。ただ古いとはいっても、どこかが壊れていたり汚れているわけではない。掃除は行き届き、丁寧に管理されていることが分かる。その佇まいは、ある意味、神社のような清冽さや荘厳ささえ感じる程だ。

そんな外観に圧倒されつつ玄関に入ると、ずらりと並ぶ従業員にフルネーム付きで挨拶されたのだ。ただでさえ混乱した頭は、さらに混迷の度合いを深めた。その結果、井上は呆然と立ちつくすしかなかったのだ。

「いらっしやいませ、井上一夫様。私は当旅館の支配人でございます」

と言う声に、我に返った井上が顔を向けた。するとそこには、夜見酒旅館と染め抜かれた印半纏を羽織り、胸には「支配人 夜見酒誠」という金色のネームプレート付けた三十歳くらいの男が立っていた。井上はその男をにらみつけるようしながら、

「これはどういうことだ？ どうして私の名前を知っている？」  
と、やっと絞り出せたという感じで、ややかすれた声を発するのが精一杯だった。

しかし支配人は、そんな刺すような視線を涼やかに受け流し、「玄関でお話するのも何ですから、まずはお部屋へどうぞ。後ほどご挨拶とご説明に伺いますので、詳しいお話はその時にでも」

と告げ、一礼すると支配人室と書かれた扉を開けて、その中へと消えていった。

井上は今すぐにもでもバッグを取り返し、森へと引き返したかった。しかし、ここにきて少しだけ頭の冷えた井上は、多少の時間を置いて説明を受けることに異論はないなと思い直した。

というのも、現在のよう混乱した状態では、何を言われてもそれを理解できないだろうし、このトラブルを適切に対処できる自信がなかったからだ。もちろん死を覚悟している以上、井上に怖い物はない。それでも、妙なトラブルで晩節を穢したくはないという程度のプライドは残っている。

現在は、この旅館の持つオーラのようなものにすっかり気圧されてしまい、何やら抗えぬ雰囲気が形成されてしまった。なんとか主導権を取り返すためにも、まずは現状の把握と、頭をもっと冷やすことが最優先だ。経営者として培った交渉術からそう判断し、自分のバッグを持って歩いて行く仲居に続いて客室へと向かうことにしたのだ。

その頃支配人は、自分のオフィスに置かれたパソコンで、予約台帳を確認していた。その予約台帳には、

宿泊者：井上一夫 様（一名様）

予約者：井上真紀子様

国籍：日本

宿泊日：2010年6月1日～2日（一泊二日）

宿泊料：黄

担当：照美

備考：2日の朝、お迎えの方が来訪。それまで旅館内で待機して

もらうこと。

と記されている。それを見て、少し切ない顔を見せた支配人だが、そこは長年サービス業に従事しているプロフェッショナルだ。両頬を軽く手のひらで二、三回叩くと、すぐに元のニコやかな顔に戻った。

### 第三話 老舗旅館（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

### 第三話 老舗旅館

支配人が少し時間をおいて客室に向かうと、井上は窓際の椅子に腰掛け、ぼーっと『森』を眺めていた。時間を置いたことで、多少は落ち着きを取り戻したのだろう。頬にはやや赤みが戻っており、表情も先ほどまでとは別人のように穏やかだ。支配人は隣に控えていた仲居に声をかけ、窓際に置かれた応接セットにお茶を用意してもらうと、改めて挨拶から始めた。

「本日は夜見酒旅館をご利用頂き、誠にありがとうございます。改めまして、自己紹介させて頂きますが、私は当旅館の支配人、夜見酒誠と申します」と、深々と頭を下げながら反対側の椅子に腰掛けた。

すると井上は、先ほどよりも柔らかかな口調で、

「先程は、突然自分の名前を呼ばれたことなどで混乱してしまいましたが、確かに私は井上一夫と申します。しかし私は、この旅館を予約した記憶はありません。人違いをされたのではありませんか？」

「いえ、私どもがお待ち申し上げていたのは、今、ここに居られる井上一夫様で間違いはございません」

「しかし、私はこのような旅館が存在していることすら知りませんでしたし、この辺りに来ることを誰かに話したこともありません。偶然にも近く通りがかった私が、同姓同名の他人と間違われたのだと思います」

「いえ、決してそのような間違いではございません」

きっぱりと言い切る支配人の顔には、自信が伺える。しかし、『青木ヶ原樹海』の中にこんな立派な旅館があると知っていたら、死に場所には選ばなかったよ。そもそも、青木ヶ原樹海に旅館があるなんて……。と、そこまで思考が至ったとき、その心を読み取ったように支配人が語り始めた。

「この夜見酒旅館は、富士の裾野にある青木ヶ原樹海のほぼ真ん中に位置しており、その存在を知る人は、あまり多くは居られません。とはいえ、今年で創業から1670年ほどを数え、それこそ長きに渡って代々ご利用頂いているお客様も居られます」

単なる旅館の歴史自慢だったのかと、危うく聞き流しそうになった、だが、いくら何でも聞き捨てのならない単語がいくつか含まれていたことに気付いた井上は、何を言っているんだという顔で支配人を見つめた。

これほどの建造物を維持管理していくだけでも、多額の費用がかかっているであろうことは想像に難くない。しかも玄関に居た従業員だけでも五十人位は居たし、裏方まで含めれば、さらに数は増えるだろう。そもそも樹海の真ん中では、客だってそうそう寄りつかないはずだ。

このように、まずは旅館の経営面に思いが至ったのは、ある意味、職業病のようなものかもしれない。経営者として長年過ごしてきた経験で、まずは商売の観点から物を見る癖が付いてしまったのだ。そんな立地の旅館を、それほど長きに渡って維持できる物だろうか。そこまで考えが至ってから、やっと思考が数字に辿り着いた。

「それにしても、創業から1670年とは、とんでもなく長い歴史をお持ちですね」

「ええ、お陰様で常連のお客様に支えられて、何とか営業を続けております。まあ実際のところは、老舗と言えば聞こえは良いですが、実際は見た通りの古さと静寂だけが取り柄の旅館なのですよ」

井上は、北陸の方に現存する中で世界で最古の旅館があるという話を聞いたことがある。また、そこには及ばないまでも、日本国内には信じられないほど長きに渡って営業を続けている老舗旅館がいくつか現存しているというのは、雑学知識として知っていた。しかし富士の麓に、しかも樹海の真ん中にそんな老舗の旅館があるなんて、これまで46年の人生で一度も聞いた覚えが無い。そのため、支配人の言葉を俄に信じていいものかと訝しんだのも無理はないだろう。

井上は支配人をじっと見つめるが、嘘を吐いている様子はない。視線が泳ぐこともなく、体のどの部分にも変化は見られない。人間は嘘を吐くときは、どこかに変化が表れるものだ。また旅館の造りもどこと無く風格が漂い、確かな歴史を感じる。第一線の経営者としての経験から、そこに嘘はないと確信できた。

ちなみに井上はそこまでは知らなかったが、北陸の方にある世界最古の旅館は『法師』という。ギネスにも世界最古の旅館として認定されており、養老2年に開業したという記録が残っている。つまり法師は、この時点で創業から1292年ということになるのだ。しかしこの夜見酒旅館は、法師よりもさらに400年近く古い歴史を持っていることになる。もしそれを井上が知っていれば、彼の人物眼を持ってしても、支配人の言葉を信じることができなかつただろう。

#### 第四話 井上の事情（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第四話 井上の事情

井上の事業が躓いたのは、テロリストに機材を提供した会社としてマスコミやネット上で吊し上げられたためである。

ある日、お世話になってる与党の大物代議士から呼び出しがあり、アフリカ某国の有力者を紹介された。その人物は、レアアースの有力な鉱山を所有しているが、ほとんど手掘りの現状で満足な量が産出できていない。かといって、最新の機材を揃えようにも予算が足りずに困っているという。そこで、採掘機器や技術を提供してもらえらるなら、今後採掘されたレアアースはすべて、井上の会社を通して日本に販売するといった内容の商談が持ち掛けられた。

昨今のレアアース事情や、今後の需要を考えれば、かなり美味しい話だ。鉱山用の機材や採掘技術は、自社の得意分野である。また、これまでもレアアース鉱山の共同開発を行い、採掘した鉱石を取り分として輸入した実績もある。つまり、未知の分野を開拓するというリスクを負うことなく、事業が展開できるのだ。

資源の確保を自分の得点としたい大物代議士も、積極的に後押しした。そういった経緯もあり、数日後には大筋での合意が得られ、仮契約が交わされた、その後は両国政府の協力もあり、調査も順調に進んだことから、さほどの時間を置かずに本契約へと進んだ。

本契約から半年後には機材の用意も調い、すぐに採掘用の機器はコンテナへと詰められ、船便で発送された。まずは現在の狭い坑道に設置するため、コンパクトで静粛性の高い機材が選ばれた、そのため、海運用の大型コンテナ1個に収まったのは、輸送費用の面でも大いに井上を喜ばせた。だが、それが躓きの原因になるとは、こ

の時は想像すらできなかった。

コンテナを送り出して約2ヶ月後、そろそろコンテナが現地に到着するかという頃に、世界を揺るがすニュースが流れた。ヨーロッパの大都市で、地下に仕掛けられた爆発物によるテロが発生し、多くの人が犠牲になったという。そしてそのテロに、井上の会社がアフリカに向けに輸出したはずの掘削機械が利用されていたことが判明したのは、さらに数日後のことだった。

捜査機関の問い合わせに対して、アフリカでの鉱山採掘用として輸出したことを契約書類と共に説明し、我々は機材を盗まれた被害者であると訴えた。ところがインターネットの掲示板に、「実は、それと知った上でテロ組織に機材を販売していたのではないか」という書き込みがなされたのだ。最初は一笑に付していた人々も、「アフリカの鉱山はテロ組織の所有であり、鉱山のオーナーから作業員に至るまで、すべてがその組織の一味である」との噂が流れたことから、徐々にバッシングが始まった。

どんな会社でも、黒とは言えないまでも『グレーゾーン』は存在する。そのようなことを挙げつらい、被害者から一転して加害者のような風潮が高まるのに時間はかからなかった。しかし事前の調査では、テロのテの字も見あたらなかったし、契約に来た有力者にも嘘の気配は感じなかった。そのような面から自身の潔白を確信している井上は、とりあえずは真摯に対応するしかないと、マスコミの取材などにも丁寧に対応した。

そこまでしても、一向に収まる気配のない状況を不思議に思った井上は、噂の出所を探ることにした。流失した情報を知る人をリストアップしていくと、大部分はライバル会社か、この件の発端となった与党大物代議士の周辺と重なることが判明したのだった。

## 第五話 下り坂（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第五話 下り坂

何のことはない。これを機に、少しでもシェアを奪おうとするライバル会社が噂を振りまいたことで、アフリカの鉾山は怪しいという世論が高まりつつあった。そこで、自分への飛び火を恐れた大物代議士が、さらに悪意のある噂を各所に振りまくことで矛先を変え、自身の隠れ蓑として利用した。その結果、二者の思惑が効果的に絡み合い、噂は一人歩きをはじめたのだ。

もちろん、大物代議士やライバル会社に抗議しようとはした。だが、当然のことながら、知らぬ存ぜぬの一点張りだ。しかも代議士の秘書からは、

「人の噂も七十五日。ほとぼりさえ冷ましてしまえばいくらでも元は取れるのだから、今は大人しくして下さい」と、脅しとも甘言とも取れるような趣旨の言葉が婉曲な表現で伝えられた。通常の状態であれば、そんな根拠のない言葉など一蹴したところだろう。しかし連日の取材攻勢や取引先との対応に疲れ切った頭ではそんな判断もできず、藁にもすがる思いで沈黙することを受諾してしまった。

これまでと一転して沈黙を保ったことにより、「後ろ暗いから黙っているんだ」とばかりに、バッシングはどんどん過熱する。そして今度は、突然、会社のグレーゾーンに司直の手が入った。これまでは、慣例的に暗黙の了解とされていた部分が脱法行為であるとして、井上が送検されたのだ。これが決定打となり、会社の信用は地に墜ちた、

こうなっては、もはや止めようもない。取引先や有能な社員が、次々とライバル会社へと流れていった。普通の業績不振ならいざ知

らず、テロや不正といった黒い疑惑のある会社に手を貸そうというお人好しなどまず居ない。あつという間に資金繰りに行き詰まり、二度目の不渡りが出たのは、テロ事件から僅か半年後のことだった。

司直の手が入ることが確定的になった時、例の大物代議士に救済を願った。だが、今度は門前払いで、電話さえ取り次いでもらえない。ここにきて、やっとトカゲの尻尾として切り捨てられたことを自覚したが、今更騒いだところで、誰も耳を貸さないだろう。

銀行も、融資の際に担保とした例の鉱山の利権が二束三文に落ちたとの理由から、返済か追加の担保を要求してきた、しかし、これまでの資金繰りにより、手持ちの資産はほぼ尽きている。最後は、自分や妻の身内に頭を下げて回るしかなかった。それで僅かばかりの借金はできたものの、結局、二回の不渡りを防ぐことは叶わなかったのだ。

それでも倒産後には、「社会正義は成された」との満足感からか、すぐに話題にも上らなくなり、検察からも証拠不十分で不起訴になったとの連絡が入った。これで、貧しいながらもやっと落ち着いた日々が戻って来たのかと思っていた矢先、今度は倒産の危機に際して借金をした、親類縁者からのバッシングが待っていた。返済について話し合う会談の場では、ある意味、身内だからその容赦のない言葉が投げかけられた。そして、その言葉の暴力が、妻の心を壊していった。

マスコミの取材攻勢やネットでの騒ぎが収まったと思えば、今度は身内からの攻撃である。そんな世間の冷たさに耐えかねた妻が、まだ小学生だった息子を道連れに無理心中してしまったのだ。

そして、その葬儀の日、まるでタイミングをまるで見計らったよ

うに、井上の会社やアフリカの鉱山は、テロとは無関係であったと  
いう報道が流れた。

## 第六話 テロ事件の真相（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第六話 テロ事件の真相

事件のあらまは、こうである。

海運会社の輸送管理を行っていたオペレータが、積荷リストから、静粛性が高いと評判の掘削機械が運ばれていることを知った。このオペレータこそがテロ組織の一員であり、これは組織の役に立ちそうだと判断したのだ。そして海運のネットワークを操作し、この港で引き渡す予定のコンテナと、別の船に積み替えられてアフリカに向かうコンテナの番号を入れ替えた。

本来ここで受け取るはずの荷受人には、ソマリア沖の先導軍船を待っている関係で到着が遅れているとの連絡を入れ、コンテナは偽装したインボイス等の書類を持参したテロ組織の手へと渡った。その後は、国境警備の手薄なEU内を陸路で輸送され、テロ現場の大都市へと運び込まれ、利用されたというわけだ。

そんな簡単な手口でと思うかもしれないが、兵器や食料品、そして特殊な規制を受けている品物でもなければ、さほど通関は難しくない。しかもコンテナ一個だったことが仇となり、通関時のチェックを甘くさせ、受け取りも容易くなった。

いつまでも到着の連絡が来ない本来の荷受人からの訴えにより、海運会社の調査が始まった。そして、その時点で逃走していたオペレータが国際指名手配され、間もなく第三国で逮捕された。取り調べに際し、前記のような自供も得られたことから事件は解明され、井上には全く罪がないことが判明したのだ。

もちろん捜査機関や関係各国の高官には、経過が逐一報告されて

いた。しかし、それがテロ関係者の洗い出しを阻害する恐れがあるという『一部の強い反対』により、オペレータが逮捕されるまでは報道発表が見合わされていたのだ。発表に際して政府は、「今回のテロによって、罪のない人や一部の企業に被害が出たのは非常に遺憾であるが、我々はテロに屈しない。被害を受けた方にはできる限りの救済策を考えていく」とのコメントを出し、公的には井上の名誉は回復された。

とはいっても会社はすでに倒産しており、アフリカの鉱山との契約はすでに債権として銀行に取り上げられている。ところが、最初に仲介した大物代議士が、国がその鉱山の債権を買取り、民間に委託して開発を援助することを表明した。テロで被害を受けた、アフリカの鉱山を救済するとの名目でだ、しかし、会社を失った井上には委託を受ける資格はない。そのため委託先には、悪意のある噂を流したライバル会社を選ばれた。

恐らくライバル会社と大物議員は、事前に打ち合わせができていたのであろう。委託先の決定と同時に、具体的な根拠と数字によって構成されたロードマップや、レアアースの埋蔵見込量を発表した。これにより、かなりの量が市場に出回るだろうとの予測から、国際的な取引価格や出荷規制も落ち着きを見せ始めた。

やがて、大物代議士とライバル会社の両者は、貴重な資源を確保して国益をもたらした時代の寵児と、連日のようにマスコミでもて囃されるようになった。藪蛇を恐れる彼らは、その影に埋もれてしまった井上のことなど、言葉の端にすら出さない。当然のことながら、最初から何も無かったかのように振る舞い、発言する。

それでも、噂で踊った取引先や銀行の担当者などからは、再建するのであれば積極的な協力をする用意があると伝えてきた。恐らく

は、罪悪感から逃れるためなのだろう。もしかしたら、大物代議士がライバル会社が、免罪符という名の口止料代わりに手配したのかもしれない。

すでに、社会的に抹殺されかけた井上を更に貶めても、得をする人は限られている。そしてライバル会社から、会社が再建されれば、鉦山の件に一枚噛ませてやるとの言葉が非公式に伝えられた。やはりこの話は、口止料だった。だとすれば、それに乗りさえすれば、確かにゼロから始めるよりは効率良く、会社を再建できるだろう。

口止め料を受取ったふりをして、そこで力を蓄えれば、彼らに一矢を報いることもできるかもしれない。そんなことも考えたが、もはやすべては終わっていると思い直した。今さら何を言っても、どんなことをしようとも、失った家族は戻らない。

妻子の法要と納骨を済ませた井上は、これが世間の目に触れたところで何も変わらないと知りつつも、これまでの経緯を詳しく綴った遺書をしたためた後、家族の後を追うべく富士の裾野にある青木ヶ原樹海へを足を踏み入れた。そして死に場所を求めて彷徨っていた時に、冒頭にある仲居との遭遇となったわけだ。

## 第七話 予約者は（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第七話 予約者は

支配人の目を見て言葉に嘘はないと確信した井上は、少し落ち着こうと出されたお茶を口に含み、そして何かを言おうとした。しかし言葉が見つからないまま、数分の時間が流れた。そのとき支配人が、

「お名前を存じ上げている件ですが、井上様のご予約は、奥様の井上真紀子様より、井上一夫様というお名前と共に頂いております」と告げた。

真紀子は、井上の妻の名前である。死ぬ前に予約を入れていたなんて、まずあり得ない。井上が樹海に足を踏み入れる決意をしたのは、当然のことながら妻の死後だ。誰かが名前を騙るにしても、樹海で自殺するなんて他人に告げるはずもない。だとすれば、やはり同姓同名の他人だろうか。そんな思考を重ねつつ、

「その井上真紀子とは……」

と、やっとの思いで口を開いた。

すると言葉を遮るように、支配人は、

「予約に関しては、私どもは確かに井上真紀子様から、今ここに居られる井上一夫様のご予約を承りました。ご予約の際、明朝九時にお迎えの方がいらっしゃるまでお待ち頂くように伝言をお預かりしておりますので、すべてはそのお迎えの方にお聞きするのがよろしいかと」

井上は、支配人の丁寧な中にもきつぱりとした物言いを聞いて、「わかりました」

と、答えた。とりあえずは納得はできないまでも、今、これ以上の情報は得られないと理解したのだ。

「それでは、お迎えの方がいらつしやるまでごゆっくりとお過ごし下さい。それと汚れた服はクリーニングして、明朝までに繕いの方も済ませておきますので、備え付けの浴衣にお着替え下さい」と支配人は言い残し、まだ何かを聞いたそうにしている井上に一礼して、部屋を辞していった。

井上は、とりあえず明日を待つことにした。ロープや包丁の入ったバッグは目の前に置いてあったが、それを開く気にもなれない。例え悪戯や間違いであったとしても、真紀子という名前が引つかかり、死への渴望を薄れさせたからだ。また、本人はそれほど意識していなかったが、この旅館から感じる神社の境内にも似た清らかな雰囲気、ここを死で穢すのを躊躇わせたという側面もある。

それに何より、死に装束が破れたスーツや旅館の浴衣では格好が付かないと考えたのだが、その瞬間、そんなことを思考する精神的な余裕が生まれていることに、我ながら可笑しささえ感じていた。

「老舗の旅館らしいが、今時、テレビも電話も置かれていない部屋があるとは思わなかったな。でも、たまにはこんな静かなところで過ごすのも悪くないか」  
などと独り言をつぶやきながら、部屋に備え付けの露天風呂に浸かり、汗や汚れを洗い流すことにした。

風呂に入っている間に、スーツや肌着類は仲居が回収したようである。脱衣籠の中には清潔なバスタオルと浴衣、そして新品の肌着が入っている。浴衣に着替えた後は窓を開け、外から入ってくる初夏の涼風を感じながら、暮れゆく森を見続けた。ゆつたりとした時間が流れていった、少し涼しくなり過ぎたかと窓を閉めたとき、仲居の「お食事をお持ちしました」

という声がかかった。

井上は、すでに気持ちを完全に切り替えていた。とりあえず明日、迎えの人が来るまでは何もわからない。わからないことを、あれこれ考えても無駄なだけだ。ましてや何かの間違いだったとしても、死ぬ覚悟のできている自分に怖いものなど何も無い。答えの出ないことに悩むより、今は出された酒肴を最後の晚餐とばかりに心ゆくまで楽しむことにしよう。

そのように考えられること自体、自分でも不思議に感じる。死を目前にした極限の状態から、ここまで変化するものか。これもこの旅館が持つ歴史の魔力か、などと多少頓珍漢なことを考えたのも、酔いのためだろう。心地よいほろ酔いのまま床につき、久々にゆっくりと眠ることができたのだった。

一方、井上との会談を終え、部屋を辞した支配人は、仲居に「よろしく願います」

とだけ声をかけ、返事を待つこともなく足早に戻って行った。そしてしばらくの後、支配人室にやって来た仲居から一通の封筒を受け取ると、丁寧に封を切り、じっくりとその内容を読み始めた。

その開いた封筒には、「遺書」と書かれている、そう、井上がこれまで経緯を詳しくしたためた遺書を、仲居がスーツや下着と一緒に回収してきたのだ。便箋に十枚ほどのそれを読み終えると、「ふう」

と短いため息を吐き、そしておもむろにパソコンを叩き始めた。

作業は、小一時間ほど続いただろうか。書類を添付したメールを送付したことで一段落したのか、今度は自分でお茶を淹れている。

それを飲み終える頃、メールの着信を知らせるアラームが鳴った。  
着信したメールの表題には「承認」と書かれており、それを見て表  
情が緩む。

「これで少しは救われますね」

との独り言には、明らかに安堵の気持ちで満ちていた。

## 第八話 再会（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第八話 再会

翌朝、約束の時間である九時になると、夜見酒旅館の玄関には2人の女性と、一人の少年がやってきた。すると支配人は、そのうちの一人の女性と目線を交わした後、仲居に向かって、「井上一夫様のお部屋にご案内してください」と告げた。

朝食を済ませた井上は、来るときに着ていたスーツに着替えていた。スラックスの泥汚れはきれいに落ち、シミ一つ無い。ジャケットトのかぎ裂きも、目をこらして見てもわからないほど、完璧に修復されていた。窓際の椅子に座っていたが、仲居から迎えが来たことを告げられると、入り口に目を向け、その場で言葉を失った。

そこには、三日前に納骨を済ませたはずの真紀子と、一人息子の貴が立つて居たからだ。幻かとも思い目をこすったが、何度こすっても消えることはない。しかも、病院で最初に見たときは思わず目を背けてしまった、悲惨な傷跡も見当たらない。

確かに火葬場で最後の別れを済ませ、三日前には自分の手で納骨まで済ませたのだ。あの悲しみや、心の痛みが夢だなんて考えられない。しかしここに居るのは、どこからどのように見ても、自分の妻子である。やはりこれは幻か、夢なのだろうか。などと考えつつも井上は、

「……真紀子、貴……」  
と声を絞り出す。

その言葉と同時に、三人はお互いに駆け寄り、抱き合って涙を流した。

「真紀子、貴」

「あなた」

「お父さん、お母さん」

お互いに名前を呼び合うだけで、会話になっていない。やがて夫婦は顔を見合わせると、お互いに詫びの言葉を繰り返していたが、

「お父さん、お母さん苦しいよ」

と、間に挟まれて窒息しそうな息子の声に、少し落ち着いたようだ。

その様子を見ていたもう一人の女性が、

「少しお話ししましょう」

と声をかけたことで我に返った三人は、言葉もなく頷き、部屋の中に置かれた座卓へと場所を移した。

全員に席に着くと、先ほどの女性が、

「私は夜見酒照美と申します。名字でわかるかもしれませんが、この旅館の女将を務めさせて頂いております」

と自己紹介した。そして軽く会釈をしたあと、

「今回の件についてご説明いたしますので、聞き下さい」

と言い、全員が了解の意思表示をしたのを確認した後に、照美の説明が始まった。

「まず最初に申し上げておきますが、真紀子様や貴様は確かに逝去されております。霊魂となって、所謂あの世へと送られるはずですが、諸事情からこちらで待機して頂くことになったのです」

さらに照美は続けた。

「今申し上げたように、真紀子様と貴様は靈魂のみの存在です。ですが今、お二人にお体があるのは、霊体がこの地下にある富士の霊脈の力を借りて、一時的に実体化したもののなのです」

真紀子や貴は、そのことは最初から知っていたのだらう、何も言わずに頷くだけだ。荒唐無稽な話ではあるが、目の前で実例を見せられては疑いようもない。

「だとすれば、妻や貴は幽霊のような存在であり、すぐにまた別れなければならぬのですか？」

と、興奮気味に一夫が尋ねると、

「一夫様が本当に望むのであれば、ある条件を満たしたときに希望は叶うでしょう」

と、何とも曖昧な答えが返ってきた。

まるで啓示のような言い回しをする人だと感じつつも、

「その条件とやらを教えてください」

と、一夫は瞬時に頭を下げた。それに対して照美は、

「簡単なことではありません。まずはこれまでの人生で、一夫様が抱いた恨みつらみのすべてを許すことです。そして同時に、一夫様がこれまでの人生で他人に与えたであろう、恨みつらみに対して、心から詫びてください。それが可能ですか？」

すべてということは、真紀子が貴を道連れに死を選ぶまでに追いつめた親類縁者はもちろんのこと、そもそも原因であるテロ組織。噂を論拠に、社会正義を振りかざした世間やマスコミ。簡単に自分を見限った社員や取引先と銀行。そして、流言で自己を守った代議士や利益を得ようと画策したライバル会社までも許さなければならぬ。

一瞬の戸惑いはあったが、もう一度妻子と過ごせる可能性がある

のなら何でもすると考えた一夫はすぐに、  
「すべてを許します。そしてすべてに詫びます」  
と、照美の目を見つつ答えたのだった。

その目に確かな決意を感じた照美は、懐からビー玉のような二つの透明な球を取り出し、それを一夫に渡した。

「本心から仰っているのであれば、それを手に持ち、心の中で許すと詫びを念じてください。この二つの球にそれぞれ白と黄色の光が灯れば、すべてを許し、すべてに詫びたという証になります」と言う。

荒唐無稽な話ではあるが、もはや疑う気持ちは皆無だった。一夫は球を握りしめ、目を閉じて一心に念じた。すると五分もしないうちに、球にはまず白い光が灯り、それから少し時間を置いて黄色の光が灯ったのだ。それを見た照美は優しく微笑み、両方の球を受け取ると、これまでとは異なる朗々とした声で

「これで条件は整った。この大日おおひるめのむち？貴の名において、この家族が輪を脱することを許可する」  
と空に向かって宣言したのだった。

## 第九話 家族一緒に（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第九話 家族一緒に

「着いて参れ」

という言葉と共に、照美は部屋を出て廊下を歩き始めた。

大目？貴という名前や、これまでの丁寧な言葉が突然、「着いて参れ」という命令形に変わったことに多少の戸惑や違和感があった。だが、そこに質問や逆らうことを許さないオーラを感じ取った一夫は、妻と息子を誘い、素直に照美の後に続いた。すると玄関とは逆の方向に向かつて進み、やがて表側と同じような作りの玄関に到着した。

もう一つの玄関には、きれいに磨かれた家族全員の靴が置いてある。また、来たときと同様に、周りには支配人をはじめ、仲居などが勢揃いしていた。そして、

「このたびは夜見酒旅館をご利用頂き、誠にありがとうございました。井上一夫様とご家族の新たな旅立ちを、従業員一同、謹んでお見送りさせて頂きます」

という言葉と共に、例によってマニュアル通りの完璧なお辞儀をしている。

その玄関には表（？）のようなガラスの引き戸はなく、高さが3メートルほどはあろうかという、金色の立派な観音開きの扉が付けられていた。扉は閉じられており、表面をよく見ると、いくつもの小さな凹みが見受けられたが、取っ手のようなものは見あたらない。どうやってここから出たらいいのかと戸惑っていたところ、照美が先ほどの球を取り出し、白い方の球を扉の凹みに押しつけた。すると、その球はまばゆい光と共に扉に溶け込んで行き、その光が消えると同時に、扉が自動的に開き始めた。

扉が開ききると、深い洞窟が現れた。支配人が

「宿泊料は、先程の黄色い球を当方にお納め頂くことで相殺となっております。さあ、このまま三人でお進み下さい。後のことは、この先に居る者がすべてを心得ておりますので、ご心配なく」と声をかけ、

「お父さん、お母さん行こう」

という言葉に頷いた夫婦は、子供を中心に手を取り合った。

当然のことながら、一夫の脳裏には様々な疑問が渦巻いている。

でも、それを追究してしまえば、今、この手にある幸せが逃げてしまいそうな気がした。だから何も尋ねず、ただ一言、

「ありがとうございます」

という言葉と共に家族は一礼して門の奥へと進んで行った。

洞窟には数メートル置きに松明が設置されており、足元に不安はない。横を見れば、真紀子も貴も微笑んでいる。洞窟を10メートルほど進んだ頃、後ろからは扉の閉じる音が聞こえた。それと同時に、一夫の意識は閉ざされた。

真紀子や貴は驚いた様子もなく、その場に佇んでいる。やがてやがて三人の体は消え去り、三つの光へと変わった。そして三つの光は寄り添うようにしながら、先に見えている光を目指して道を進んで行くのだった。

## 第十話 エピローグと夫婦の会話（前書き）

この物語はフィクションです。

実在していたり、歴史や架空上の人物や団体等の名称が出てきても、それはオリジナルのものとは一切関係ありません。

## 第十話 エピローグと夫婦の会話

それから数時間後、夜見酒夫妻は支配人室で静かにお茶を飲んでいた。照美は、手に持った黄色い球をじっと見つめている。

「こんなに深い黄色は、久しぶりに見たわ。よほど恨みが凄かったのね」

「井上様は信じていた人たちに裏切られて、すべてを失ったんだ。それに込められた怨念はどれほどか、想像するだけでも恐ろしいよ」

「これほど強い怨念が、樹海に瘴気としてまき散らされていたら、この霊脈にどれほど悪影響を与えたことでしょうかね」

霊脈とはこの星の純然たるエネルギー流であり、星の内部を血液のように駆けめぐっている。この樹海は、それがたまたま地表に近い位置を流れている。そして井上一家の例を見てもわかるように、霊脈には魂を実体化できるほどの強い力がある。

当然のことながら、エネルギーに意志はなく、そこに善も悪もない。だが、強い瘴気が霊脈に触れたとき、悪意に引つ張られる形で、悪い方向に力が動くことがあるのだ。通常ならば、それは恨みの対象へと向かっていく。しかし大きすぎる瘴気は、対象が恨みのある個人に留まらない。社会全体へと向き、それが自然災害などに結び付いた例も少なくないので、霊脈の管理者としては注意が必要なのだ。

「命を救うことはできなかつたけど、それが防げたのは僥倖と言うヤツかな。もっとも一部の瘴気は、例の代議士や親類縁者達に飛ん

でいったみたいだけどね」

そう、井上は旅館に来る前に、すでに命を落としていたのだ。森を歩いているときに躓き、岩角に頭をぶつけてしまったのが致命傷だった。それを自覚できず、靈魂が死に場所を求めて彷徨っていたところを仲居に誘導され、夜見酒旅館に案内された。死んでから仲居に声をかけられるまでの間、僅かながらも怨念は瘴気となって靈脈に流れた。それが恨みの対象まで飛んでいったのである。

「それは、彼らの自業自得。今回だけでなく、これまでも別の人から多くの瘴気が彼らに向かっているみたいよ。今回は靈脈の力もあるし、彼らは長くないわね」

「肉体的なものか、社会的なものかまでは分からないけれど、彼らにとって最も辛い形で死を迎えることになるだろうね」

「いずれ肉体的な死を迎えても、瘴気で汚れた魂のままでは輪廻に戻れないわ。辛い修行で洗い流しても、輪廻の輪に戻る頃にはこの星が無くなっているかもしれないわね」

「まあ、井上様の一家三人も輪廻から外れたわけだけど、彼らは自分の意志で輪廻に戻ることもできれば、そのまま幽世かくりよで暮らすこともできるしね」

「とりあえあえず、負の感情は怨念の黄泉球としてすべてここに置いていったし、慈愛の白球で門を開けたから準神格を得る条件も整っているわ。後は、修行して神を目指すのもよし、輪廻の輪に戻るのもよし、そのまま黄泉で暮らすのもよしよ」

「比良坂を歩く三人は幸せそうだったし、しばらくはあっちで暮ら

すことになるんじゃないかな」

「それは家族で話し合って決めることだから、私たちは干渉すべきではないわね」

「そうかな、修行は辛いから、俺としては神はお勧めしたくないな」

「それは修行もせずに、神になった誠らしい意見ね」

「その代わり幽世に住まず、何千年も現世うつしよで門と霊脈の管理人をやってるんだ。オマケに、1670年前からは旅館の支配人まで押しつけられたし。そのくらいは役得ってモンだよ」

「私と結婚したことで得た神格なんだから、素直に私に感謝しなさい」

「はいはい、感謝しております。天照大神様」

「現世では照美だつて言ってるでしょ」

その時、

「間もなくお客様が到着されます」

との声が聞こえ、仲居達が門のある方の玄関へと移動していく気配がする。本日のお客様は、所謂、異世界からの迷い人だ。今度は生き人なので、誠が担当となり、照美が旅館内の案内役だ。

「まったく、この門が霊脈の力で『あらゆる世界』と接しているおかげで休む暇もない。たまには休みが欲しいよ」

「そのおかげで現世に害が及ばないんだから、我々、神としては感

謝しなくちやね」

「へーい、照美様」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2114t/>

---

夜見酒旅館

2011年8月7日08時19分発行